



地域の文脈と重層性に着目した歴史的資源とまちづくりに関する研究―兵庫津における明治期の地籍図・旧土地台帳を中心とした分析を通じて―

陳, 鍼

(Degree)

博士 (工学)

(Date of Degree)

2024-09-25

(Date of Publication)

2026-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9016号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492525>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 3)

論文内容の要旨

氏 名 _____ 陳 鉞 (CHEN CHENG) _____

専 攻 _____ 建築学 _____

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

地域の文脈と重層性に着目した歴史的資源

とまちづくりに関する研究

—兵庫津における明治期の地籍図・旧土地台帳

を中心とした分析を通じて—

指導教員 _____ 山口 秀文 _____

(注) 2,000 字～4,000 字でまとめること。

1. 研究の背景・目的

本論文は、地域・都市・土地の固有性を尊重する都市計画・デザインの方法論を探究する研究スタンスに立ち、地域の文脈の観点から、歴史的環境を基盤とする都市空間のまちづくりの方法を探究するものである。建築学における計画的視点から、地籍図と旧土地台帳を用いて都市空間の復元を行い、現在の地図を重ね合わせることで地域の文脈を構成する諸要素の考察から、まちづくりにおける地域の歴史的資源を顕在化させる方法を明らかにすることを目的とする。

日本では、歴史的資源を活かした研究には多くの蓄積があり、その中心は、伝統的建造物群保存地区の保存とまちづくりに関するものが典型的であり、かつ代表的と言える。しかし、筆者は、伝建地区に相当する歴史的建造物群の蓄積がほとんどなく、過去において極めて特徴のある歴史的資源を持ち合わせた地域であったが、現在、特に物的なものが消滅してしまった地域において、過去の面影を伝える要素を地図上で顕在化し、それを歴史的資源として活用することは、現代のまちづくりにおける重要な課題の一つとして認識し、研究を進めている。このような観点から、歴史が積み重ねられた土地の履歴や、明治維新以降の都市開発によって変化した所有形態は、地域の歴史を伝えるための重要な要素であり、地域の空間的・社会的文脈の継承を読み解くための一つの手がかりと考えられる。特に、産業革命と近代以降の土木技術の発展とともに、都市の空間的形態は急激に変化してきた。しかし、都市建設は連続的な過程であるので、物的環境が大きく変化しても、土地の中に受け継がれている社会的なものもある。このことは、消滅した歴史的・伝統的なまちとの関係性を解読することが有効な手法であることを意味していると考えられる。

これらの観点から、本研究では兵庫県神戸市兵庫区南部地域に位置する「兵庫津（ひょうごのつ）」と呼ばれた地域を対象とした。

兵庫津の歴史には、奈良時代から摂播五泊の一つとして「大輪田泊」、平安時代の日宋貿易の拠点、中世に「兵庫津」と呼ばれる港町、中世末の城下町、近世江戸時代の大坂への往来や物資の運輸機能を果たしてきた北前船寄港地（宿場町・港町）、明治以降に形成されてきた工業地域、という古代から近代までの多様な要素が重層している。しかし、明治以降の新川運河・兵庫運河開削等の都市開発と戦災被害により、兵庫津の物的な歴史的資源が殆ど消失した。旧兵庫津の範囲に位置する現在の都市空間は、近世とその後の近代以降の断絶により、その歴史的・伝統的な空間的文脈が見えなくなっている。一方、兵庫津では、2018年に北前船寄港地として日本遺産に認定され、2021年11月に兵庫津ミュージアム・初代県庁館、翌2022年11月には、同・ひょうごはじまりが開館し、「兵庫津」としてのまちづくりの機運が盛り上がりつつあり、今後のまちづくりにおける歴史的資源を掘り起こすために、文脈の連続性の観点から、近世と近代、さらに現代へと文脈をどう繋げていくが重要な課題となっている。

2. 論文の構成と各章の概要

論文は序章、本論（第1～7章）、結章から構成されている。

序章では、研究の背景・目的、基本概念・用語、対象地域の特徴、本研究の着眼点、論文構成等を述べる。研究課題として、本研究の位置づけと研究方法を、地域の文脈の「重層性」・「連続性」・「微視的」という3つの視点から述べる。本研究の地籍図・旧土地台帳による「土地の分析」という史的研究の分析方法を用いて、歴史的環境を基盤とする都市空間変容の考察と今後のまちづくりにおける「場所性」とセットする歴史的資源の顕在化の手法を述べる。

本編では、第1章「対象地域の歴史的まちづくりの現況とその計画課題」と第2章「レイヤーモデルからみる都市空間の変遷と地域の文脈の構成」、第3～第6章「江戸期・明治期の都市空間の復元とその特徴」の地籍図・旧土地台帳を中心とした分析、第7章「兵庫津における歴史的資源の顕在化」から構成されている。本研究では、第3章～第6章の土地の履歴という都市史の調査のプロセスによって得られた知見を、地域の文脈として読み取って、過去の消滅や目に見えない資源が見えるようにするやり方で、まちづくりにおける歴史的資源を顕在化させる方法を確立することを目指している。

第1章では現地ヒアリング調査を中心に行政・地元による歴史的まちづくりの展開とそのまちづくりの課題を検討した。「兵庫津」という地域では、近代以前の兵庫津のまちと近代以降の新川運河・兵庫運河という二つのテーマや資源を繋げていくために、歴史的資源を顕在化させる方法が求められているという計画課題を提示している。

第2章では「兵庫津のまち」の形成の歴史について、兵庫津の歴史的環境を基盤とする都市空間の変遷を5つの時代区分で整理し、時間軸で重ねたレイヤーモデルを構築している。本章では、レイヤーモデルを用いて、地域の文脈を、「中心・拠点」・「ネットワーク」・「境界」（建築的視点で「点・線・面」の体系）を構成する諸要素の形態的或いは機能的の連続的な変遷を整理し、歴史的環境に大きく影響を与えた明治期のレイヤーの位置づけの重要性を指摘した。

本編の第3～第6章は絵図、地籍図・旧土地台帳を用いた歴史的環境を基盤とする都市空間の解読である。まず第3章では、「江戸時代の兵庫津人名録」（郷土史家・元神戸史談会副会長・前田章賀作成）に記述されている町別の屋号（苗字）と役職・職業などの情報を基に、江戸時代後期（1769年）の兵庫津三方（岡方、北浜、南浜）の屋号の分布状況を整理し、①全域型、②都心型、③沿道（西国街道）型、④特化型という業態分布から、兵庫津の三方の各町の特徴を明らかにした。

第4章では、第3章の成果をふまえ、さらに、明治43年の地籍図・旧土地台帳などの資料を用いて、近世末から明治時代に至るまでの都市構造の変化について、明治期の土地開発に着目し、伝統的な都市構造から近代の工業地域への構造転換を、土地利用と土地所有の二つの視点から解読することを試みた。CADで作成した兵庫津地割全体図を通じて旧土

地台帳のデータベース化の作業を行った。これにより、明治以降の兵庫津における土地開発を概観し、新たにできた土地の開発時期・規模から、①元禄期の町場、②幕末期・明治初期の拡張、③明治9年「開墾」の新土地、④明治22～43年の土地開発（土地利用転換と新規土地）という4つの領域に分類された。また、「都道府県別資産家地主総覧兵庫編1・2」等の資料から、土地所有者の職業・社会背景と明治期の土地開発との関係を考察した。これにより、明治期の都市空間は近世兵庫津の歴史的環境の「継承的構造」として、西国街道の軸性が維持されている一方、鉄道沿線や新川運河周辺、海岸埋立地で大地主・商人層が所有する新たにできた土地の集積形態によって新たな都市構造が見てとれる。また「江戸時代の兵庫津人名録」と「明治初期兵庫津三十八ヶ町土地台帳名簿録」（同前田章賀作成）を中心に、新川運河周辺・海岸埋立地の土地を持っている北風家や嘉納家、国鉄沿線に多くの土地を持っている小曾根喜一郎、という地域の豪商・有力者が近世末から明治期までの都市空間の変容に密接な関係を持っていることが推察される。それらの「地域名望家」が所有する土地の利用と所有形態に着目した視点は、江戸時代から明治時代に至る兵庫津の空間的・社会的な文脈を解読するための有効な方法と考えられる。

第5章～第6章では、第3章で示した土地の履歴による兵庫津の「4つの領域」について、大規模な土地開発が行われた「北浜」と「明治9年開墾の新土地」を対象に考察を行った。旧土地台帳と地籍図の情報を改めて読み、データ化することにより、一筆一筆を原単位として遡りながら土地の変化を比較し、近世・近代の接点としての都市空間を詳細に復元した。この明治期の「都市空間の復元図」を通じて第5章・第6章の分析を進める。結果として、第5章では、明治期における土地利用の転換の分析を通じて、現在の地図をベースに、空間構成の諸要素を「都市域」、「区画」、「地割形態」、「道路」、「拠点施設」、「寺社地」として取り上げて考察した。第6章では、明治期に新たにできた「新川沿岸地・海岸埋立地」の380筆の土地を考察した土地所有者属性と土地所有形態の分析から、新川運河の開削は兵庫津の歴史的環境に大きな変化を与えた一方、兵庫津の「地域名望家」が明治期に開削された土地を大量に所有することで、土地に潜んでいる社会的関係が前近代から明治期に至るまで受け継がれているが窺える。

第7章では、各章の知見をふまえ連続的な文脈および「場所性」の観点から、レイヤーモデルによる各時代の資源の重層性を地図上で表現したことで、歴史的資源を顕在化させる手法を提示している。さらに、兵庫津のまちづくりに関わる地域組織の会員とまちづくりに関係している行政職員を対象にアンケート調査を実施し、本研究で明らかにした歴史的資源のまちづくりに対する有効性と今後の可能性を評価した。結章では、各章の知見をまとめ、1) 地域の文脈の見方、2) 土地の履歴と向き合う分析・デザインの視点、3) レイヤーモデルの体系、という3点において歴史的資源の図化と評価、まちづくりに関する地域の歴史的資源の顕在化させる方法について論じる概念図を作成し、同時にその方法の利点や限界、今後の可能性として、そのまちづくりへの価値を提示・展望している。

氏名	陳 鉞		
論文 題目	地域の文脈と重層性に着目した歴史的資源とまちづくりに関する研究 —兵庫津における明治期の地籍図・旧土地台帳を中心とした分析を通じて—		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	中江 研
	副 査	教 授	槻橋 修
	副 査	准教授	栗山 尚子
	副 査	講 師	山口 秀文
	副 査		

要 旨

本研究は、過去において極めて特徴のある歴史的資源を持ち合わせた地域であったが、現在は歴史的建造物等の歴史を伝える物的環境のほとんどが消滅してしまっている地域において、歴史的資源を認識・抽出し、顕在化させる方法を明らかにすることを目的とする地域計画論的研究である。

日本において、物的環境としての地域の歴史的資源の発見・評価とその保存・活用に関しては、主に建築史・都市史分野の学術的な調査研究にもとづいてなされている。法令・制度としては、文化財保護法や景観法、歴史まちづくり法等の法整備がなされ、それに基づく空間整備が行われている。そして、それらをまちづくりにもつなげる施策が各地で展開されてきた。一方で、近世以前に形成されたまちにおいて、明治以降の近代的な都市基盤の整備、戦災、現代の都市開発などにより物的な歴史的資源が失われたことで、その歴史性をまちづくりにつなげ活かすことが課題となっている地域も多い。

都市計画分野での地域の歴史的資源を発見し、まちづくりに活かす方法に関しては、佐藤滋による地域の自然、地形と歴史の関係を読み取り、それらをレイヤーモデル（重層性）の方法によりまちづくりに活かす視点や、日本建築学会都市計画委員会創造的地域文脈デザイン小委員会による、地域文脈が地域における過去から現在、未来への発展的なプロセスのなかに見出されるなんらかの継承的な構造・価値であるという考え方など、すでにいくつもの研究がなされている。

こうした研究においても、物的な歴史的資源が地域に残されていることが前提とされている。それに対し、本研究は、上述した物的な歴史的資源がほとんど残されていない地域における歴史的資源の顕在化の方法として、地籍図や旧土地台帳などの土地所有に関する歴史的な文書資料を用いる方法をとっている。歴史的な学術研究課題における分析ではこのような資料は用いられているが、まちづくりを直接の目的として、こうした資料を用いることを方法化しようとする点に本研究の新規性、独自性が認められる。

本研究では具体的な対象地域を、兵庫県神戸市兵庫区の兵庫津と呼ばれる歴史的に特徴のある地域としている。この地域は、奈良時代の大輪田泊から、平清盛による日宋貿易の拠点、戦国時代の兵庫城築城、江戸時代から明治にかけての北前船寄港地・兵庫津として栄えた。さらに、明治以後の近代の開発とともに工場地域となり栄えるも、1945年の神戸大空襲により兵庫津としての物的環境が破壊された。戦後、戦災復興を経て、高度経済成長期以降、工場地域としての衰退から、特に兵庫運河を中心としたまちづくりが展開されてきた。その中で、2021年11月に兵庫津ミュージアム・初代県庁館、2022年11月には同・ひょうごはじまり館が開館し、2025年度には神戸市歴史公文書館（旧岡方倶楽部の利活用）が開館予定であり、「兵庫津」としてのまちづくりの機運が盛り上がりつつある地域である。この研究対象の選定は課題設定に対して適切である。

本研究では、地元のまちづくりの中心人物であるよみがえる兵庫津連絡協議会会長T氏及び兵庫津日本遺産の会役員、兵庫津ミュージアム設立に関わっている兵庫県地域振興課Y氏、神戸市歴史公文書館設立に関わっている神戸市文書館T氏等、地元のまちづくり関係者、行政の重要な関係人物からのヒアリング調査を丹念に行い、それらと収集した絵図・地図資料、地籍図、旧土地台帳の分析・考察を行なっている。

本論文は、序章、本編（第1章から第7章）、結章から構成されている。

序章では、研究の背景・目的、問題意識、基本概念・用語、研究対象の選定とそのモデル性、研究方法、論文の構成について述べている。

第1章「対象地域の歴史的まちづくりの現状とその計画課題」では、ヒアリング調査を中心に地元地域・行政による歴史的まちづくりの展開とその課題を整理し明らかにしている。近代以前の兵庫津と近代以降の兵庫運河・工業地域という二つのテーマと資源を繋げ、歴史的資源の掘り起こしと現代の都市空間における活用という課題があり、歴史的資源を顕在化させる方法が求められていることを指摘している。

第2章「レイヤーモデルからみる都市空間の変遷と地域の文脈の構成」では、地域の文脈の観点から、史誌や絵図、地形図、空中写真などの資料から兵庫津地域を、地域全体レベルにおける歴史的資源の成り立ちからその変遷を分析し、歴史的環境の構造を解説し、その兵庫津地域固有の構造を基盤として歴史的

資源を読み取る必要性を述べている。兵庫津の歴史的環境を基盤とする都市空間の構造的変容を5つの時代区分で整理し、時間軸に沿って各時代区分の都市空間を重ねたレイヤーモデル（重層性）を作成している。次に、そのレイヤーモデルを用いて「中心・拠点」、「ネットワーク」、「境界」という空間要素の形態的または機能的な変化を整理している。地域の文脈と重層性の視点から、それぞれの要素と兵庫津全体の構造的変容との関連性を明らかにし、明治期のレイヤーの「時代移行」としての位置づけを述べている。

第3章～第6章は絵図、地籍図、旧土地台帳による「都市空間の復元図」の作成、その復元図から歴史的環境を基盤とする都市空間の解説と歴史的資源の掘り起こしを行なっている。

第3章「江戸時代における兵庫津の都市空間の解説」では、元禄期の絵図、郷土史家・元神戸史談会副会長・前田章賀作成の「江戸時代の兵庫津人名録」を主な資料とし、記載されている約4000人について、その屋号（職業）の兵庫津における分布状況から各町の空間的社会的特徴を述べている。

第4章「明治期の土地開発における兵庫津の構造的変容と土地所有形態に関する考察」では、1910(明治43)年の地籍図と旧土地台帳を資料に、近世末から明治期に至る都市空間の変化について、明治期の土地開発に着目し、伝統的な都市構造から近代の工業地域への構造転換を土地利用と土地所有の点から解説している。CADで兵庫津全体を一体化した地籍図を作成し、一筆一筆の土地への旧土地台帳のデータベース化作業を行ない、「都道府県別資産家地主総覧兵庫県編1・2」等の資料から土地所有者の職業・社会背景と明治期の土地開発との関係を分析・考察している。その結果、兵庫津の明治期の都市空間が近世兵庫津の歴史的環境の「継承的な構造」と近代の新たな都市構造を有している実態を明らかにしている。

第5章・第6章では、作成した1889(明治22)年と1910(明治43)年の兵庫津全体の地籍復元図「都市空間の復元図」と旧土地台帳から、近世兵庫津の自治組織単位の一つであった「北浜」と1875(明治8)年の新川運河開削に伴い生じた「新川沿岸地・海岸埋立地」を対象に明治期の都市空間の復元とその特徴を土地利用と土地所有から明らかにしている。第5章では、北浜における明治期の土地開発と土地利用の転換の分析を通じて、近世初期(元禄期17C)の町場、近世後半の海岸埋立、1876(明治9)年の海岸埋立、明治後半の土地開発による4つの領域で北浜が構成されており、近世の街路骨格や入江の埋立、寺社の分布による空間構成の明治期への継承を明らかにしている。第6章では、「新川沿岸地・海岸埋立地」の380筆の土地を対象に、新川運河の開削が兵庫津の歴史的環境に大きな変化を与えた一方で、それによって生じた「新川沿岸地・海岸埋立地」では、兵庫津の大地主や起業家などの地域名望家との密接な関係を維持していることを明らかにしている。これらの地籍図と旧土地台帳を資料とした分析・考察により、土地に内在する社会的・機能的なものが歴史的資源としての価値があることを指摘している。

第7章「地域の文脈と重層性による兵庫津の歴史的資源の顕在化と評価」では、各章で見出した歴史的資源を「性質」・「かたち」の2軸で分類し、レイヤーモデルによる各時代の資源の重層性を現代の地図上で表現することで歴史的資源を顕在化させる方法を提示している。それは、兵庫津の空間構造と歴史的資源の分布を現代の都市空間にレイヤーとして重ね、場所性の継承・変化と歴史的なまちづくりの拠点施設や場所との関係を歴史的資源として評価するものである。それらにより得られた歴史的資源を3つのタイプとして説明している。それは、①まちの空間構造に関するもの、②拠点的なもの、③まちづくりの活動の過程の中で浮かび上がるもの、である。

結章では、本研究の対象である兵庫津で得られた歴史的資源の顕在化の方法をモデルとして示し、より一般化し、広く歴史的資源を活かしたまちづくりに資する知見を得ている。それは以下である。目に見えない歴史的資源の顕在化という課題に対し、第1段階は現在の地域のまちづくりにおける課題の認識、第2段階は、地域の基層となる空間構造の解明と地域の歴史的環境における地域の文脈の「攪乱」と「時代移行」の要素と時代の明確化、第3段階は、時代の変化に伴う地域の構造的変容における、歴史的資源の都市・まちレベルでの全体的把握と地籍図・旧土地台帳による土地の履歴と歴史的資源の認識・抽出である。そして、第4段階では、第2段階と第3段階より得られた歴史的資源に関して、地域の文脈の「継承的な構造」と変化する場所性による考察・評価を行い、まちづくりの課題と対応させて現在の都市空間・地図と照合し、地図上に顕在化させる。第5段階で地域住民などまちづくりに関わる主体による歴史的資源の評価を行い、歴史的資源およびその活用方法を充実させていく。その中で、歴史的資源には、専門家により読み取られた歴史的資源とまちづくりを地域と共に行う過程で浮かび上がる歴史的資源があることを指摘しており、研究と実践をつなぐ重要な視点を提起している。

本研究は、物的な歴史的資源が消失してしまった地域において、史誌、地図、地籍図、旧土地台帳などの資料とまちづくりに関わる重要人物への丁寧なヒアリング調査より、時間的空間的重層性と地域の文脈に着目して歴史的資源を掘り起こし、その認識・抽出とその顕在化の方法を明らかにし、歴史的まちづくりに活かすモデルを提示している点に価値があり、まちづくり、都市計画、地域計画について重要な知見を得たものとして価値ある集積である。提出された論文は工学研究科学学位論文評価基準を満たしており、学位申請者の陳鉞は、博士（工学）の学位を得る資格があると認める。